

研究論文

保育者養成校における子育て支援に関する研究（1）

—学生のレポート分析を通して—

梶 浦 真由美・鍛 治 紀美子・清 水 貴子

A Study of Child Care Support for Families in
a Training School for Pre-school Teachers(1)

—Through Analysis of Students' Reports—

KAJIURA Mayumi, KAJI Kimiko and SHIMIZU Takako

I. はじめに

1990（平成2）年の「1.57ショック」が契機となり、国の少子化社会対策が講じられ10年以上が経過した。その間、国の子育て支援政策を背景に、行政をはじめさまざまな施設、機関で子育て支援事業が積極的に展開されてきた。本学科では、1993（平成5）年より道内の保育者養成校（以後養成校）にさきがけ、附属幼稚園に「子育て相談研究センター」を設置し活動をはじめた。一時休止した時期もあったが、昨年度よりあらたに子育て支援事業に取り組むことになり、本年度は2年目を迎えた。昨年度は、手探り状態の下での実施だったが、今回現場経験を長くつむ専門教員スタッフが2名担当として加わることになり、前年度の取り組みの

反省のもとに、プログラム等の見直しをはじめ内容についても詳細に検討し充実をはかった。

ところで、昨年度は、本学科1年生129名が授業「保育実習研究」の一環として、毎回15名前後が実習という形で参加した。その結果、以下の3点が明らかとなった。①子どもと接する経験の乏しい学生にとっては、地域で子育てをしている親子と接する良い機会になる。②先輩学生（2年生が毎回数名参加した）の子どものかかわりの様子や実技の様子を直接観察することにより、明確なモデル像を形成することができた。③子どもと接する場を持つことにより、主体的に学習していこうとする意欲を喚起することができた¹。このように、養成校として子育て支援に取り組むことは、学生にとって非常に意義があることがわかった。

ところで、2001（平成13）年児童福祉法が一部改正され、保育士業務に児童の保育のみならずその保護者に対する保育に関する指導を行うことも規定された。さらにこれを受けて翌年、保育士養成課程も改正「家族援助論」が創設され、教授内容として「子育て支援」が明確化された。養成校として、将来の保育者に子育て支援を遂行していくための十分な能力をつけていくことは、重要な役割といえる。このような社会的要請を踏まえて、多くの養成校で子育て支援事業を展開している。

そこで、本稿では、本年度は昨年度を踏襲したもので事業展開自体に大きな違いはないが、とくに学生の参加状況に変化があった。その点に焦点をあて、本年度本学幼児保育学科で取り組んだ子育て支援事業の実践を通して、どのような効果があったのか明らかにしたい。また、他養成校の特色ある子育て支援事業を展開している事例を概観し、今後の参考としたい。

Ⅱ. 地域における子育て支援サービス

まず、本学における実践を報告する前に、地域における子育て支援サービスの実態を整理し、具体的活動例をみることにする²。

行政の地域の子育て支援サービスとしては、①一時保育の推進 ②地域子育て支援センターの設置促進 ③つどいの広場の設置促進 ④幼稚園における子育て支援活動 ⑤シルバー人材センターによる子育て支援サービス ⑥商店街の空き店舗を活用した取り組み ⑦市民活動活性化モデル事業がある。本項では、養成校が子育て支援に取り組む上で多くの示唆が得られると考えられる「地域子育て支援センター」と「つどいの広場」の実践を取り上げることにする。また、あわせて特色ある子育て支援を実践している養成校も紹介し、概観することにする。

(1) 地域子育て支援センター

前述したように1990年の1.57ショックを契機に、わが国の少子化の認識が一般化することとなる。その上で、1994（平成6）年「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（エンゼルプラン）が策定され、少子化対策への取り組みが始まった。このエンゼルプランの具体化の一環として、1995（平成7）年度から1999（平成11）年度までの5年間の計画として「緊急保育対策等5か年事業」が策定された。その具体的な内容の一つに子育て支援のための基盤整備として、地域子育て支援センターの整備が掲げられた。その後、エンゼルプラン及び緊急保育対策等5か年事業を見直す形として、1999（平成11）年「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について」（新エンゼルプラン）が策定され、2000（平成12）年度から2004（平成16）年度までの計画がたてられた。地域子育て支援センターに関しては、設置目標値として平成11年度1500ヶ所から平成16年度には3000ヶ所が掲げられ、設置箇所数の増加・拡充が図られてきた。

地域子育て支援センターは、地域の子育て家庭に対する育児支援を行うために、保育所において地域の子育て家庭に対する育児不安についての相談指導、子育てサークル等への支援を行うものである。平成11年997箇所から平成16年2786箇所に拡充された。地域の実情に応じて①育児不安等についての相談指導 ②地域の子育てサークル等への育成・支援 ③乳児保育や特別保育事業の積極的实施・普及促進の努力 ④ベビーシッターなど地域の保育資源の情報提供等 ⑤家庭的保育を行う者への支援の5事業のうち3事業（小規模型は2事業）を選択し実施することになっている。

札幌市の場合は7施設で実施されており、たとえばA保育園における実施内容をみると、育児相談、育児講座、子育てサークル運営・支援、

情報提供, 保育所開放(遊び・遊び場の提供), 乳児を対象にした親子遊びや手作りおもちゃの紹介などが行われている。これらは, 一部除き月曜から金曜日の毎日実施されている。

このような地域子育て支援サービスの展開のほかに, 札幌市では, 地域で安心して子育てができるように, 0歳から就学前の子どもを育てている家庭を対象に, 親子が自由に集い交流できる場を提供する子育て仲間作りをねらいとした「子育てサロン」が, 1997(平成9)年から児童館を会場に市内99会場で実施されている。月曜から金曜まで各児童館1日2会場で午前中開催されている³。

(2) つどいの広場

「つどいの広場」は, 現代の子育て家庭が閉塞された状況下で子育てをしていく中で, さまざまな問題が生じていることを背景に, 2002(平成14)年度から実施されている。主に3歳未満の乳幼児とその親が気軽に集まり, 相談, 情報交換, 交流できることをねらいとした事業である。NPOをはじめとする多様な主体により, 公共施設内のスペース, 商店街の空き店舗, 学校などの余裕教室, マンション・アパートの一室などを活用しながら, 身近な場所での設置を推進するものである。2004(平成16)年度現在, 全国で159か所となっている。事業内容としては, ①子育ての親子の交流, 集いの場を提供すること。②子育てアドバイザーが, 子育て・悩み相談に応じること。③地域の子育て関連情報を, 集まってきた親子に提供すること。

④子育て及び子育て支援に関する講習を実施することの4事業である。事業実施は, 週3日以上行うことを原則とし, 茶菓代などは, 利用者から実費を徴収するものである。

地域子育て支援センターや子育てサロンは保育所や児童館などの公共の施設を会場に, お役所主導型の傾向があるが, つどいの広場は, 大上段に構えるのではなく家庭的な雰囲気の中

で, お茶を飲みながら打ち解けた雰囲気の中で, 問題解決を図っていこうとするところが特色で, 今後, 更なる拡充が期待されている。

(3) 養成校における特色ある取り組み

つぎに養成校の特性を生かした子育て支援事業を展開している, 札幌大谷短期大学及び東京家政大学の実践を取り上げ紹介する⁴。

《札幌大谷短期大学の子育て支援センター つどいの広場「んぐまーま」》

札幌大谷短期大学では, 2005(平成17)年9月地域に開かれた大学として, 地域の声を教育と研究に生かしたいとの目的で, 子育て支援センターを開設した。センターには, つどいの広場(通称「んぐまーま」)が開設され, 地域の親子, 学生, 教員, 専門スタッフが集い, 気軽に情報交換しながら共に育ち会うための広場となっている。毎週木曜日前午10時から午後3時まで開催されている。参加料として, 保険料相当分ひと家族100円を徴収する。時間内であれば利用時間は自由で, 昼食を持参し食べることもできる。

このセンターの大きな特徴は, 子育てNPOと大学が協力して実施していることで, 全国的にも先駆的な試みである。すなわち, 当短大卒業生(同窓生)の有資格者により20年近く子育て家庭を支えてきたNPO法人子育て応援「かざぐるま」のメンバーが, 専門スタッフ要員として協力していることである。活動内容としては, ①「つどいの広場」: のんびり親子が集える場の提供 ②「お楽しみ会」: 親子で楽しめるプログラムを, 学生が企画し実施する。③「子育て相談」: 教員および有資格の同窓生が対応する。④「子育てサークル支援」: サークル設立・運営への助言や会場提供などを行う。⑤「学習会」: 身近なテーマを取り上げての参加型講座を保育科教員が担当する。の5つがあげられている。

とくに, 学生にとっては, 「家族援助論」(「か

どぐるま」の代表であり「んぐまーま」スタッフの一員が授業担当)の講義の中で、保育現場に出る前に子育て中の親子と触れあう学習の機会をもつことは、重要である。また、現場で20年子育て支援に携わってきた大先輩の保育のあり様を直接観察、指導を受けることは、学生にとって大きな力となることはいうまでもない。養成校として、画期的取り組みに期待するところは大きい。

《東京家政大学のヒューマンライフ支援センター「ヒューリップ」》

東京家政大学は、人々の生活にかかわる衣食住のエキスパートとして教育・研究をおこなってきたが、これまで培ってきた知的資源を、学生のみならず地域社会に還元する目的で、ヒューマンライフ支援センター(通称ヒューリップ)を設立した。人間生活の基本であるファミリーを支援する地域社会に根ざした生活科学情報の発信所、大学を利用した新しい知的コミュニケーションの場として、広く地域社会の人々や卒業生に活用してもらえ施設を目指している。

この活動の一環として子育て支援サロン「ヒューリップすくすくサロン」が展開されている。0から3歳児と保護者を対象にした「であい」「ふれあい」「育てあい」の場として月に6回開催している。大学の教員や学生を交えてのおしゃべり、ヒューリップがセレクトしたおもちゃや絵本で自由気ままに遊んだり、マルチメディアで情報収集したり、イベントを行ったりする。子どもの年齢で、0歳児の日、1歳児の日、2、3歳児の日と区切り、予約無し参加無料で受け付けている。

このほか特に「お姉ちゃんとあそぼう!」では、学生が企画した各学部学科の専門性を生かしたイベントが実施される。たとえば、児童学科の学生は、オリジナル人形劇、絵本の読み聞かせなど。栄養学科では、子どもが喜ぶ手作り

お菓子。服飾美術学科の学生は子供服のリメイク。英文学科ではEnglishで絵本の読み聞かせなどが企画され披露される。児童学科のみならず学科を越えて、将来を担う子どもたちのために教育機関もっている資源をフル活用し還元していこうとするところに大きな特徴がある。本学と同様の専門学科を有しており、学ぶところは多々あるといえる。

以上、行政及び養成校における子育て支援の実情を概観した。とくに、養成校における取り組みは、上記以外にも多くの施設・機関で実施されている。行政の取り組みとの大きな違いは、利用者(とくに、子ども)にとって、保育者の卵である若い学生と関わりを持てるということであろう。いわゆる「子の育ちの場」として果たす役割は大きいといえる。

Ⅲ. 本学科における子育て支援の取り組み —2005(平成17)年度の場合—

本項では、本学科による本年度の取り組みを紹介し、主催者側からみた効果を学生に課したレポート分析を通して明らかにする。2004(平成16)年度より新たに梶浦が担当者として、子育て支援事業に取り組んでいる。初年度は、手探り状態のもと実施されたが、前述したように多くの成果が確認できた。2年目を迎えた本年度は、看護師及び保健師等の資格を持ち長く現場経験のある教員と9年間幼稚園教諭として勤務した教員2名が、新たに担当者として加わった。昨年度の反省のもとに内容を充実して取り組んでみた。

(1) 事業の概要

昨年度は、公開講座が主目的で実施された事業であったが、その成果を踏まえて、本年度は、子育て支援を念頭におき実施した。その際、目的は、あくまで第一には、地域社会の子育て中の方々に養成校がもっている施設・設備、人材、

ノウハウ等を開放して、地域社会に貢献することである。また、養成校としては、子育て支援を遂行する能力を学生にもつけていくことが求められていることは前述したとおりである。

そこで、本年度は、学生の定員増が計られ、昨年度のような方法をとることは、物理的に不可能となった。そのため、2年生通年の授業「保育実践演習」を受講する学生が毎回10名前後参加することにした。1年生に関しては希望者をつのり、人数調整を行いながら参加者を決めた。

本年度「ぶんきょうワクワク広場」は、5月から12月まで（但し、9月は除く）の月に1度、土曜日、全7回、10時から11時30分まで実施した。昨年度、1、2月も実施したが季節柄利用者が激減したため12月までとした。また、11月実施した「かんたんでおいしいおやつづくり」で観察された子どもたちの食欲状況等から、12時までは長すぎると判断し、30分切り上げ時間は11時半までとした。内容は、表1のとおりである。本年度は、昨年実施した絵本講座、食育講座のような公開講座は実施しなかった。場所は、本学体育館（5月～8月）、附属幼稚園ホール（10月～12月）で、1日の流れは表2のとおりである。昨年同様、遊びのコーナー（折り紙、お絵かき、積み木、ぬいぐるみ、運動等）を設け、学生と子どもたちが自

由にかかわれるようにした。傍らで保護者は、子どもたちを見守ったり、また保護者同士で会話をしたりしている。10時から10時半までは、自由遊び、10時半から11時過ぎ頃までにその月のテーマに沿った内容を展開した。その後、自由遊び、11時半終了という流れである。

本年度は、昨年経験のいかして、内容的には大きな変化はないが、細かいところで現場経験のある教員のアドバイスも参考にし検討した結果、以下の試みを取り入れてみた。①利用者には出席カードを発行し、毎回出席するごとに季節のシールをはることにした。このカードは、「保育実践演習」で図画工作担当教員のゼミ生が中心になり作成した（写真1）。②利用者に学生であることが一目でわかるように、全員が同一のエプロンをした。③開始と終了時にアンパンマン体操のCDをながし（それにあわせて学生はアンパンマン体操をする）、メリハリをつけた。④折り紙クラブの学生が協力し子どもに人気のキャラクターの折り紙を折って、利用者にプレゼントした。⑤利用者に、撮った写真を記念にプレゼントした。

以上の試みに加えて、担当教員の能力を生かし、子育てに関する相談業務は鍛冶が担当した。

（2）結果と考察

利用者は、表1のとおりで一番多い時で、

表1 平成17年度「ぶんきょうワクワク広場」の内容と利用者数

月日 (土曜)	内 容	講 師	利用 者数	世帯 数	父	母	子供
5/14	みんなで楽しく遊びましょう	江別おはなしナーニ	48	19	3	15	30
6/18	おもいっきり運動遊び	平岡英樹助教授	30	11	2	10	18
7/9	親子でかんたん指あそび手あそび	清水貴子講師	28	10	0	10	18
8/6	昔あそびをしてみよう	札幌市三代交流の会・ コスモスの会	16	6	1	6	9
10/15	みんなで？であそぼう	てんとう虫の会 (南区藤野)	17	7	1	7	9
11/26	折り紙で折ってみよう・遊んでみよう！	梶浦真由美助教授	19	7	1	6	12
12/17	クリスマスお楽しみ会	幼児保育学科学生	29	11	1	9	19

表2 一日の流れ

9:00～	準備
9:30～	受け付け
10:00～10:30	自由遊び
10:30	アンパンマン体操 (オープニング)
10:35～11:10	毎月のテーマに沿って活動
11:10～11:30	自由遊び
11:30	アンパンマン体操 (エンディング)・終了
11:35～12:00	後片付け・反省

48名 (19家族)、少ない時で16名 (6家族) であった。7回開催し、利用者延べ人数は187名であった。昨年度と比較すると利用人数が減っている。これは、附属幼稚園児の利用者が減少したことや保険料として一人50円徴収することを広告に掲載したこと (但し、6月以降は徴収はしていない)、附属幼稚園の子育て支援事業と一緒にポスター (写真2) にのせることで、当幼稚園への入園が前提であると思込み、利用を躊躇する場合があることなどが影響しているものと思われる。また、開催当初特に利用者が多いのは、広告として新聞チラシに出して (南区の北海道新聞配達宅に配布) 日が浅いこと等が考えられる。しかし、利用人数は、昨年に比べ減ったが、利用者にはリピーターが数家族あったことは、大きな成果である。さらに、本年度は、昨年に比べると利用者の子どもの年齢が低くなっていることが特徴である。一歳に満たない乳児が毎回1, 2名利用していた。「ワクワク広場」での様子は、写真3～6のとおりである。

また、本年度は、1年生の参加希望者を毎回募ったところ、特定の学生に限定される現象がおきた。7回すべて参加した学生も数名いた。そこで、2回以上参加した学生にレポートを提出してもらい、記述内容を分析しどのような効果があったか検討することにした。学生11名から回収でき、そのうち多数回 (6～7回) 参加したもの5名と、2回参加したもの1名 (2, 3回参加したもの6名の記述を分析したところ内容に大きな違いはない) の記述を表3に示した。

その結果、まず、少数回参加者 (ケース6) と多数回参加者 (ケース1～5) では、その記述内容に大きな違いがあった。前者は、記述内容が表面的で抽象的であるのに対して、後者は、より具体的な内容が記載されている。すなわち、ケース1～5の記述内容から以下の5点が確認された。①初めは何をしたら良いかわからず、また、子どもともどのように関わったらよいかわからなかったが、回を重ね参加することにより、子どもとの関わり方を教員や先輩、同級生から学んでいく (ケース1～4)。②利用者の中にも複数回利用する子どもたちもいて、その子どもたちと馴染みになり、かかわりを持つ中から、子どもたちの成長・発達を確認していく (ケース1～3)。③各分野の専門教員がスタッフとして加わることにより、赤ちゃんの抱き方や保育者としての専門家の保育を直接観察することができるなど、現場教育から多くのことを学ぶ (ケース4・5)。④単純に参加するのではなく、具体的課題をもって参加する。また、失敗を通して、授業で学んだことを再確認する (ケース5)。

以上より、より多く参加する方が、学びの質が深まり、効果が大きいことがわかった。そのことは、学生のみならず利用する子どもたちにとっても大事なことであるといえる。

また、出席カードは、毎回利用者が持参し、出席のたびにシールが増えていく喜びは、利用者のレポートにつながっていったのではないかと思われる。アンパンマン体操も、子どもたち

表3 「ぶんきょうワクワク広場」1年生参加者の感想

<p>ケース1 (男子7回)</p>	<p>最初の2回位は、うまく子どもと関わることができず、先輩や友達がうまく関わっているのを見て、軽い劣等感をもちました。まずは、やっていることを真似してみようと、折り紙コーナーで先輩がやっていることに混ぜてもらいましたがうまくいきませんでした。その後、A君とカプラで遊びましたが、これは自分の好きな遊びだったので楽しくできた。そのことは、自分の自信になっていった。(中略) 最初の回から関わっていたA君は何もしゃべらない寡黙な子でしたが、最後のクリスマス会では、自分から小さな声で話しかけてくれ、帰りに折り紙をプレゼントすると笑顔でありがとうと答えてくれました。とても感動しました。</p>
<p>ケース2 (男子7回)</p>	<p>初めは、何をしたらよいかわからず準備にもとまどっていたのが、回数を重ねるうちにいろいろなことがわかるようになってきた。(中略) R君は、11、12月に来てくれたが、11月に来たときはクリスマスツリーにすごく興味を示した。その時は電飾の色を聞いても答えることができなかったのに、12月の時にははっきりと「赤・青・緑」の3色を答えてくれ、ものすごく成長を感じた。弟のK君(9ヶ月)は毎月本当に大きくなるのがわかった。</p>
<p>ケース3 (女子7回)</p>	<p>初めて参加した時には、子どもたちとの関わり方や準備、後片付けまで何もわからず戸惑うばかりでした。しかし、先輩や友達の子どもたちとの接し方を見ているうちに子どもたちから話しかけられるのを待っているのではなく、自分から話かけることで子どもとの関わりが始まるのだと感じた。また、先生方やボランティアのお母さん方が子どもや保護者と関わっている姿をみて、子どもへの言葉かけや保護者の悩み、話し方など勉強できた。(中略) また、とくに2回目以降は乳幼児の成長を実感することができた。たとえば、11月には上手に踊れなかったり、表情をあまりみせなかった子が、今回は上手に踊ることができていたり、表情が豊かになっていたことは、私が子どもたちの成長を実感した瞬間でした。私たちにとってはほんの1ヶ月だけど、子どもたちにとっては貴重な1ヶ月であることがわかりました。</p>
<p>ケース4 (女子7回)</p>	<p>最初は、子どもたちとうまく接することが出来るか不安だったけど、来てくれた子達は楽しそうだし、一緒にアンパンマン体操を踊ってくれて毎回のよう子育で支援に参加して良かったと思っていました。それから、子育て支援では毎回する内容が違うので、子どもたちだけでなく自分達のためになることも多かったです。私が、一番印象に残っていることは、清水先生の担当した時のバルーンをやったことです。その時に一緒に遊んでいた女の子は、初めはおとなしくて「何して遊びたい？」と聞いても恥ずかしいのか何も言ってくれなくて「おえかきしようか」と言ったらうなずいてくれお絵かきをしたりしていました。ところが、みんなでバルーン遊びを始めると、今までとは違いとっても可愛い笑顔を見せてくれて、その後からは積極的にボール遊びのコーナーに行きたいと主張してくれるようになり、最終的に仲良く遊ぶことができてとても嬉しかったです。もう一つは、赤ちゃんを抱っこすることが出来たことです。ちょっと緊張したりもしたけど、とてもいい経験をする事ができました。来年も進んで参加したいと思います。</p>
<p>ケース5 (女子6回)</p>	<p>私の目標は、「保育所実習に向けて、赤ちゃんと多く触れ合う」でした。発達段階と照らし合わせて観察してみても本当に個人差が大きかったです。そして、抱っこの仕方を学びました。声かけなども大切だということを感じました。そして、赤ちゃんは意外と重いので長く抱っこしていることは困難でした。もっと体力をつけなければいけないと思いました。(中略) 最後の回で受付を担当したのですが、保護者と一緒にきていなかった子がいたことを先生方に伝えることができませんでした。そのことで、子どもが不安になって泣いてしまったことが今も悔やんでいます。清水先生もおっしゃっていたように報告・連絡・相談がとても大切だと痛感しました。</p>
<p>ケース6 (女子2回)</p>	<p>私は、5月と6月に参加しました。とくに5月は初めて参加したので、何をしたら良いかわからずあまり積極的に行動できませんでした。でも、子どもたちの笑顔や保護者の方々の楽しそうな顔をみて色々学ぶことができました。鍛冶先生に実際に赤ちゃんの抱き方を教わったり、清水先生のこどもへの声かけの仕方、先輩たちからも色々学びました。また、5月のときにきていたお母さんたちのサークルの方々の手遊びや劇なども大変勉強になりました。</p>



写真1 「出席カード」



写真2 「ポスター」

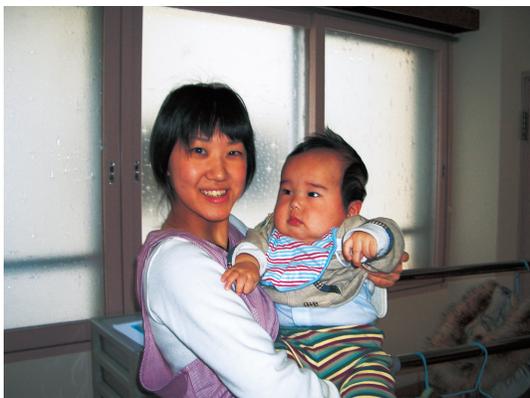


写真3



写真4



写真5



写真6

「ぶんきょうわくわく広場」での様子

にとっても人気で好評であった。

IV. まとめ

本学科におけるあらたな子育て支援事業も、2年が経過した。今年度は、全7回実施した。特に参加した学生状況に、昨年とは異なった傾向がみられたので、あらためて1年生のレポートの記述内容の分析を通して、どのような効果があったか検討した。結果は以下のとおりである。

1. 子どもと直接かかわりを持つことは、多くの学びがある。
2. より多く子どもとかかわりを持つ方が、学びの質が深くなる。

すなわち、子育て支援の現場での経験は、理論と実践が結びついた教育が可能である。そのことにより、学びの質がより深まることが明らかになった。子育て支援に関してより高い能力をもった学生を輩出していくことが、養成校としての社会的役割として期待されていることは、周知のとおりである。だとするならば、従来の保育現場実習の他にも、子育て中の親子とかかわりを持つ場を、養成校が学生に提供していくことは非常に意義があり、そのための整備は急務であろう。

その意味で、札幌大谷短期大学と同窓生がコラボレートしての取り組みは、全国的にも珍しく興味深いものであり、今後に期待するところは大きい。また、東京家政大学の取り組みも、児童学科のみならず他の学科もそれぞれ学科の独自性を出し、学内全体で学際的に子どもとかかわっていかうとする体制は、学ぶところがあると思われる。

ところで、本年度の取り組みで、利用者としてリピーターが数家族あったことは、注目すべきことである。次稿第二報では、利用者へのインタビューをとおして、彼らが養成校の子育て

支援を利用する上で、どのようなニーズをもっているのか、また、養成校としての取り組みは、行政の事業と比べて、利用者にとり、どのようなメリットがあるのか利用者側における効果を明らかにする予定である。

注及び参考文献

- 1 詳細は、梶浦真由美・清水貴子「子育て支援における保育士養成校の役割」『北海道文教大学研究紀要第29号』、2005年3月29～38頁参照のこと。
- 2 平成16年版「少子化社会白書」内閣府P.130～P.133を参考とした。
- 3 1と同様。
- 4 各大学ホームページを参照し整理しまとめた。

Abstract

We began to study child care support for families two years ago. This year, we studied it seven times. Because students involvement this year differ from last year's, we analyzed the contents of submitted reports and examined their effects. The results were as follows:

1. The more children the students deal with directly, the more the students learn.
2. The more children the students deal with, the more the students' quality of learning increases.

In other words, theory and practice come together in the actual locale where students assist in educating children. In so doing, there is shown to be a clear improvement in the quality of learning.